

海の森から届く、カラフルな贈り物。

日本海・太平洋・津軽海峡と、道南エリアはぐるりと海に囲まれた土地です。そんな見慣れた海岸線で見つかる「海藻」が、こんなに美しいアート作品に変身すること、ご存知でしたか？



陸の植物の葉が緑ばかりであるのに対し、海藻は褐色（褐藻）・紅色（紅藻）・緑色（アオサ藻）などとカラフルです。これは、海の深さで海底へ届く光の波長が異なり、それらを有効利用するための適応や進化の結果です。

海藻おしば？

夏になると道南の海岸線に褐色の昆布が敷きつめられます。ご存知の昆布干しの風景です。このコンブと、写真でカラフルな色彩や美しい造形を楽しんでもらっているアート作品の素材は、同じ「海藻」の仲間です。

海藻「押し葉」は、もともと学術用標本です。そのため、一般的ではなく見た目の美しさも「二の次」。そこへアート感覚を取り入れたのが、グラフィックデザイナーでもあった野田三千代さん（海藻デザイナー、研究所代表です）。筑波大学の横浜康継さんと共同で、今から20年以上も前に「海藻おしば」を創作しました。

海藻の生きる海

海底に生える海藻は、コンブ・ワカメ・ノリのように、ふだん食材としての姿を目にするだけです。もし海岸にうち寄せられた海藻を見つけても、砂にまみれた姿へ関心を向ける人は少ないでしょう。

しかし私たち人類にとつて、海藻は非常に大切な存在です。地球の環境問題が語られる時、酸素の供給源として陸上の森林が注目されます。地球誕生から

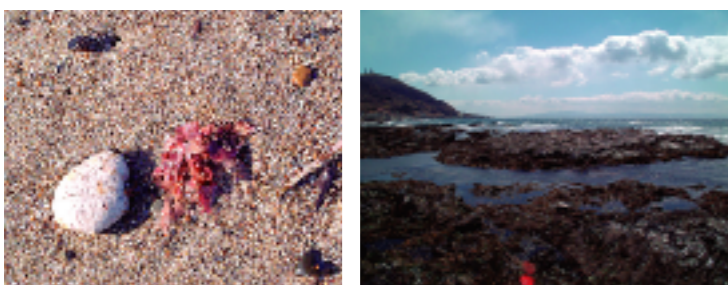
46億年、陸上に生物が登場したのは4億年ほど前のできごとです。実はそれまでの長い長い期間には、植物プランクトンなど海の生物による「光合成」で酸素が放出され、大気がつくられてきました。このおかげで、生物に有害な紫外線を防ぐオゾン層が形成され、陸上へも生物が進出したわけです。そして今も、海藻が生い茂る「海の森」では酸素がつくられています。美しい海藻が育つには、海が美しいままに保たれる必要があります。野田さんは「海藻おしば」を通じて、地球環境への関心を持ってもらいたいと考えています。

春の海岸へ

多くの海藻は秋に芽生え、海水温が低くなる冬にぐんぐん成長します。初夏には「実りの秋」をむかえ、盛んに胞子を放出し、秋が来る前に枯れてしまいます。寒のり漁は厳冬期に海水のかぶる岩場にでかける辛い仕事です（よく腰痛の悩みを聞きます）が、「海藻おしば」づくりの海藻採集の季節は春。海が荒れた次の日に、できれば潮が引いた穏やかな海岸へ行くと、豊富な種類の海藻（※）を採集できます。海に入り込み、海藻を採つてくる必要はありません。

せん。桜が散るころまで海藻は成長し、道南では4月～5月いっぱいまでが「海藻おしば」に適した海藻を採集する目安です。また採集した海藻は冷凍保存することができますので、いつでも「海藻おしば」づくりを楽しめます。それでは、みなさんも「海藻おしば」に挑戦してみましよう。

※食用になる海藻は、基本的に漁業関係者の大切な資源ですので、「海藻おしば」には使用しません。



形の良い海藻を探すのも楽しい。

戸井町釜谷の海岸にて

工夫次第でユニークなイラストにもなる海藻おしば。（襟裳岬「風の館」）

しおり（野田三千代さんの作品）
かわいらしい「しおり」は、海藻おしばづくりの入門編。読書を楽しくさせる小粋なアイテム。

① 野田三千代・横浜康継（共著）『海藻おしばを楽しむ』（日本ヴォーグ社・1400円＋税）
② 野田三千代・横浜康継（共著）『海藻おしば カラフルな色彩の謎』（海遊舎・2700円＋税）

もっと知りたい!!



スジメ（野田三千代さんの作品）
長さ2メートル以上にもなる海藻。昆布の仲間でも道南の沿岸でも採集できる。



ワカメ（左右とも、野田三千代さんの作品）
なじみあるワカメも、アレンジひとつでアート作品に変身。



クロミル（野田三千代さんの作品）
実物は高さ90cm、野田さんがこれまでに作った中で一番大きな作品。



ウルシグサ（野田三千代さんの作品）



ホノオ（野田三千代さんの作品）
もともとの色はもう少し暗い赤だが、海藻おしばにして数か月で鮮やかなピンク色に変身。



フクロツナギ（野田三千代さんの作品）